

別海町歴史文化遺産「旧国鉄標津線光進駅跡」について

令和5年9月 別海町郷土資料館

1 物件の概要

本物件は、1962(昭和37)年(又は1961年)に国鉄標津線泉川駅と西春別駅の中間に、釧路鉄道管理局指定の仮乗降場として開業し、1967(昭和42)年に光進駅となった旧標津線の駅の跡である。1989(平成元)年に廃駅となったが、鉄筋コンクリートと古レールで作られた簡易ホームが一部現存する。簡易ホームの床板の大きさは幅約2m、長さ約30mである。別海町泉川114番9に所在する。



写真1 旧国鉄標津線光進駅跡現況

2 光進駅開業の経緯

光進駅が置かれた泉川地区は、別海町の南西部に位置する。戦前は陸軍軍馬補充部川上支部・根室支部の放牧場であった土地であり、戦後に開放されて1948(昭和23)年より入植がはじまり、特に満州からの引き揚げ者が多く入植した¹⁾。既に泉川地区東部を通る国鉄標津線(標茶駅—根室標津駅間)が開通しており、1944(昭和19年)に設置されていた泉川信号場が、1952(昭和27)年に泉川駅となった。木材や木炭の出荷が盛んとなり、駅周辺は商店や住宅が並び、映画館まで作られるほどに賑わいを見せたが、木材が枯渇すると駅前の市街地は一気に衰退していった。



写真2 1988年9月の光進駅(西崎さいき氏撮影)

1962年5月1日²⁾(又は1961年12月1日³⁾)、泉川駅から西春別駅方面4.6キロ地点に光進仮乗降場が置かれた。この開業の経緯については不明であるが、特に地元の高校生が標茶高校あるいは中標津高校に通学するための交通手段として、地元からの要望があったためと思われる。

仮乗降場名として光進が使われ、停車場への格上げ時に光進駅となったが、実際に駅が置かれているのは泉川地区であり(図1参照)、光進地区とは学校区も異なっている。駅名が付けられ

1) 別海町泉川郷土史編集委員会編『別海町泉川郷土史 風蓮川源流を拓く—泉川のあゆみ—』(1975年)、11-14頁。 檜山満夫『別海沿革史 旅路 地域編』(2005年)、261-262頁。特に北斗班の11名は全員満蒙開拓青少年義勇軍の出身者であった。前掲書『別海町泉川郷土史 風蓮川源流を拓く—泉川のあゆみ—』、100-101頁。

2) 石野哲(編)『停車場変遷大事典 国鉄・JR編 II』JTB、1998年、926頁。

3) 釧路鉄道管理局営業部「駅員無配置駅・仮乗降場の乗降人数」(1965年)(石川孝織氏蔵)では、光進仮乗降場の開始年月日を「36・12・1」としている。これは石野前掲書とは食い違う日付である。また、別海町光進開基50周年記念実行委員会編『別海町光進郷土史 風蓮川源流 汗拓の輝跡—あゝ歩みたり50年—』(2000年)には、「光進駅は昭和37年に誕生する」(75頁)とある。釧路鉄道管理局編『釧路鉄道管理局史』(1972年)をはじめ、管見の限り鉄道史関係資料、地域資料、新聞記事に光進仮乗降場設置についての記述は他にないことから、現時点においては開業年月日は併記という形にしておきたい。

た経緯も不明であるが、旧標津線の上春別駅や春別駅同様、実際に駅がある地域名とは異なる駅名が採用されている。

釧路鉄道管理局が1965(昭和40)年2月22日から24日の3日間行った調査によれば、光進仮乗降場の乗降者数は、1日平均9.3人であった⁴⁾。1967(昭和42)年4月1日には仮乗降場から停車場(駅)に格上げとなったが⁵⁾、旅客扱いのみの駅員無配置駅であった⁶⁾。

1970(昭和45)年度には光進駅の乗車人員は12,126人と1万2千人を超えていたが、これをピークにその後の車社会の到来や周辺人口の減少により急速に減っていき、僅か8年後の1978(昭和53)年度には1,882人と2千人を切ってしまった(表1参照⁷⁾)。1989(平成元)年4月30日のJ R 標津線廃止に伴い、光進駅も廃駅となった。

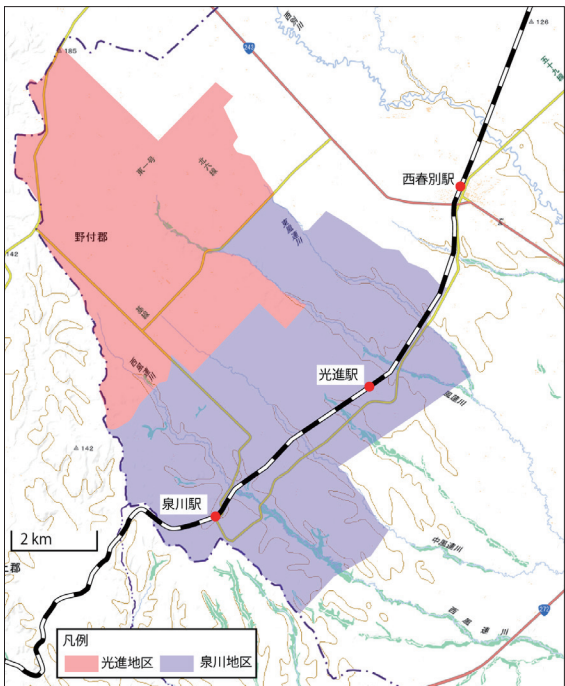


図1 光進・泉川地区区分図



図2 光進駅航空写真(1978年)

国土地理院空中写真(1978年10月25日撮影 CHO784-C12-2)

年度	定期外（普通）				定期		旅客合計	
	下		上		下			
	発	着	発	着	発	着	発	着
1967	598	441	483	865	6,373	946	8,400	8,625
1968	782	499	173	1,406	7,347	1,530	9,832	10,782
1969	682	656	160	1,314	5,548	3,770	10,160	11,288
1970	628	579	140	916	5,379	5,979	12,126	12,853
1971	636	1147	175	810	5,737	4,389	10,937	12,083
1972	573	496	132	857	3,895	2,767	7,367	8,015
1973	583	434	266	299	3,847	3,318	8,014	7,898
1974	311	618	711	389	2,412	3,071	6,505	6,490
1975	183	572	417	264	1,130	3,908	5,638	5,874
1976	165	495	275	373	824	3,436	4,700	5,128
1977	143	157	249	233	822	1,645	2,859	2,857
1978	127	91	230	184	946	579	1,882	1,800
1979	158	96	215	265	701	944	2,018	2,006
1980	136	91	204	188	733	727	1,800	1,739
1981	101	116	189	126	577	550	1,417	1,369
1982	108	172	208	170	550	0	866	892
1983	641	182	431	149	245	183	1,500	759
1984	64	134	60	95	702	0	826	931
1985	171	150	132	94	1338	31	1,672	1,613
1986	295	154	141	184	1187	30	1,653	1,555

表1 光進駅発着旅客数(太字が乗車人数)

4) 釧路鉄道管理局営業部「駅員無配置駅・仮乗降場の乗降人数」(1965年)
5) 石野前掲書、928頁。
6) 『標津線の五十六年 彩雲鉄道』、85頁。
7) 日本国有鉄道北海道支社(総局)編『鉄道統計年報』(昭和40-53年度、昭和58年度)、日本国有鉄道『鉄道統計年報(別冊) 駅別発着通過数量』(昭和50～57、59～61年度)を元に作成。旅客合計は、定期券所持の乗客は1日1往復乗車するとみなして算出した。石川孝織編著『釧路市立博物館ブックレット 尺別駅と直別駅』(2019年)、33頁参照。

3 光進駅跡の現況について

光進駅廃駅後も、簡易ホームは撤去されずに残された。2020（令和2）年、別海町役場商工観光課に所属する地域おこし協力隊員が中心となり、駅名標復元（写真3）などの整備が行なわれた。敢えてホーム近辺の樹木等を伐採しないことで、幻想的な雰囲気を保っている。

また、ホームのすぐ南東側には、旧陸軍省軍馬補充部根室支部の軍馬放牧場土塁遺構があり、泉川地区の交通と軍事の歴史を同時に感じ取ることができる場所になっている。

同じく別海町歴史文化遺産に認定されている上春別駅跡や平糸駅跡とともに鉄道ファンの注目度は高く、今後見学者の増加が期待される。



写真3 復元された駅名標

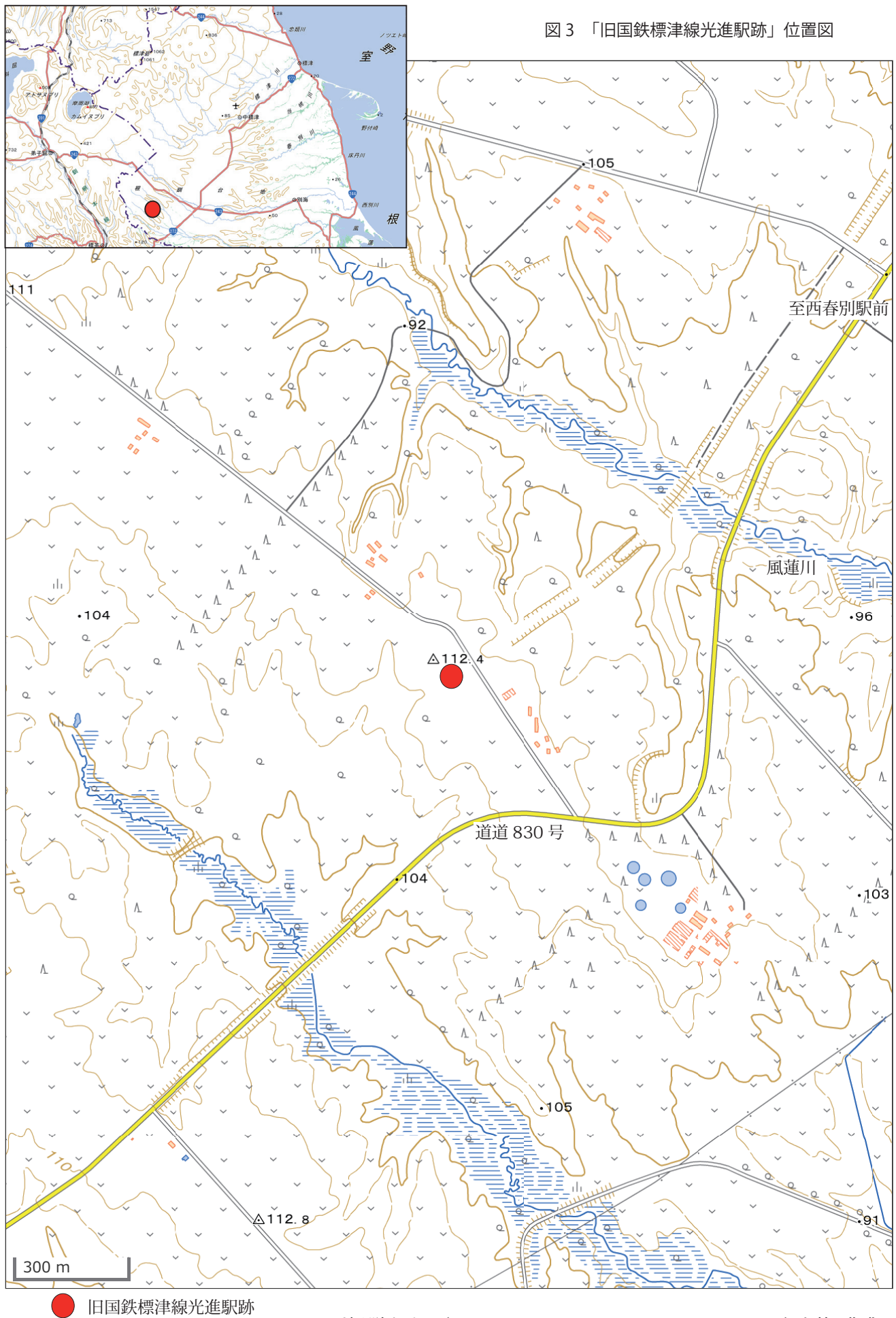
謝辞

本稿の執筆に当たり、釧路市立博物館の石川孝織学芸員から関係資料の提供と内容に関するご教示を頂きました。ここに記して感謝いたします。

追記（令和5年9月）

所在地を修正しました。

図3 「旧国鉄標津線光進駅跡」位置図



地理院タイル (<https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>) を基に作成。